

2026年 AI地殻変動：日本が取るべき「勝ち筋」の生存戦略

2026年、AIは性能競争から「コストとROI」の時代へ移行しました。中国製モデルが米国製の最大100分の1のコストで台頭する中、デジタル赤字と人材不足に直面する日本が、強みである「フィジカル（物理）データ」を活かして生き残るための処方箋を解説します。

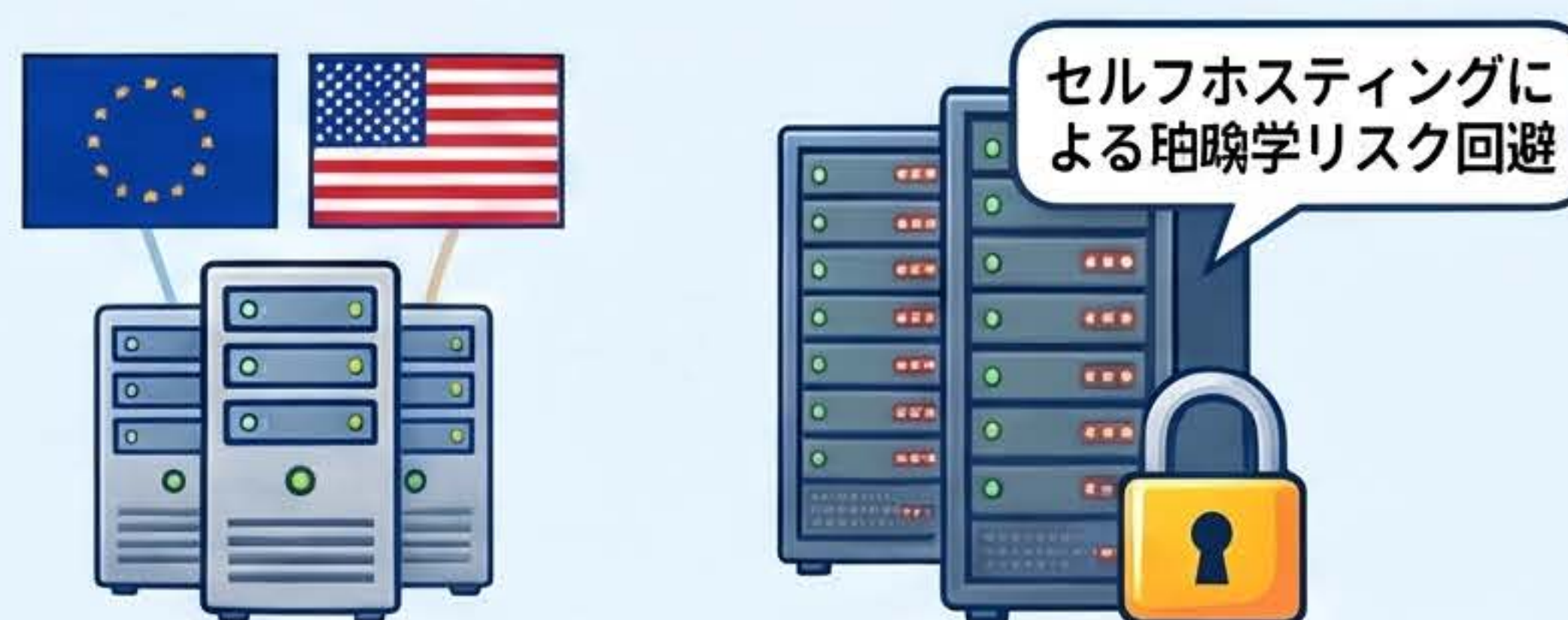
【現状と課題】AIのコモディティ化と日本の危機

米国製の「100分の1」の圧倒的コスト破壊



中国製モデル（DeepSeek等）が性能を維持しつつ驚異的な低価格を実現。

欧米テック企業による「中国製AI」の採用加速



地政学リスクを回避する「セルフホスティング」により導入が一般化。

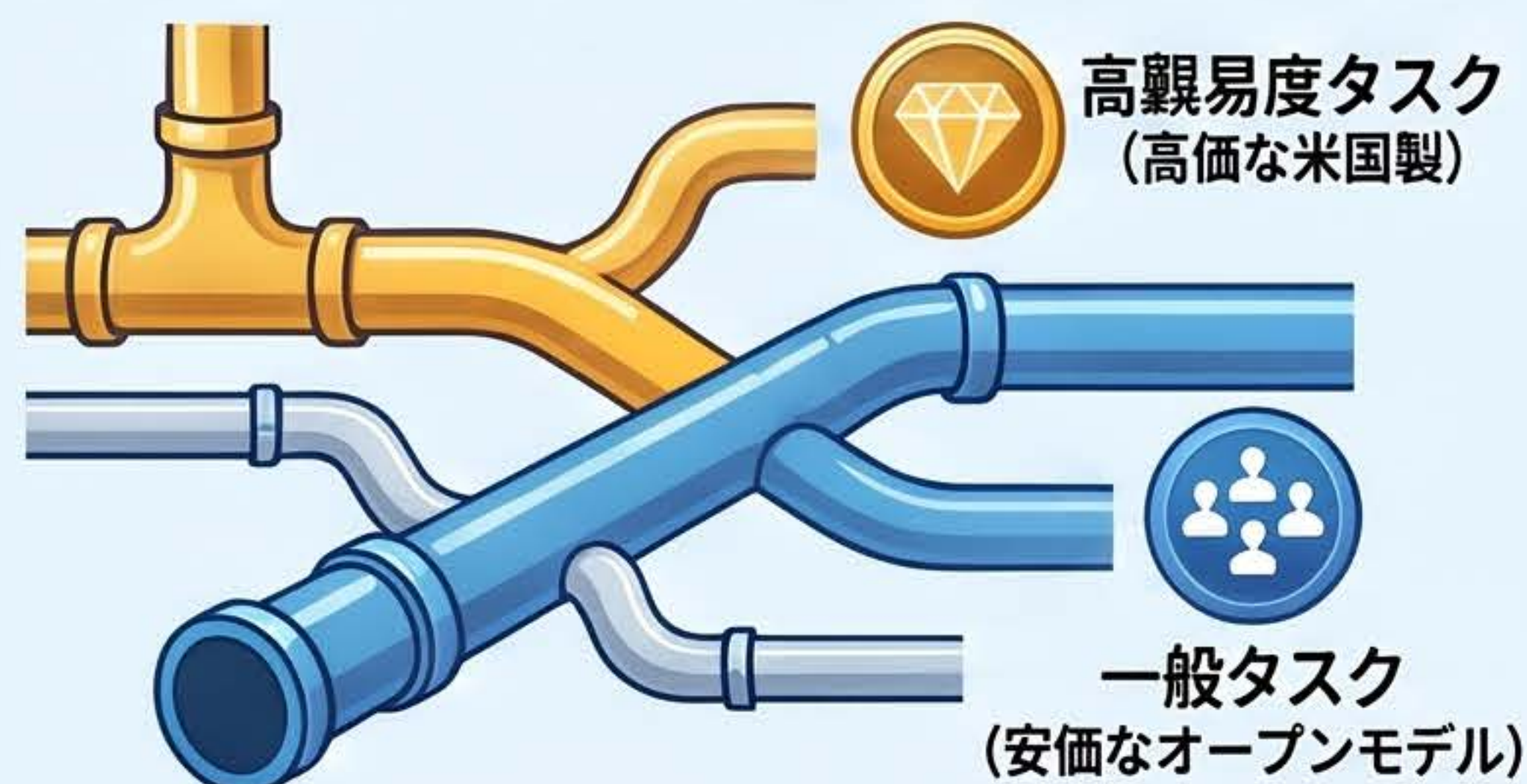
日本の「デジタル赤字」は年間6兆円超へ



海外サービスへの依存が続き、AI人材も2030年に12.4万人不足する予測。

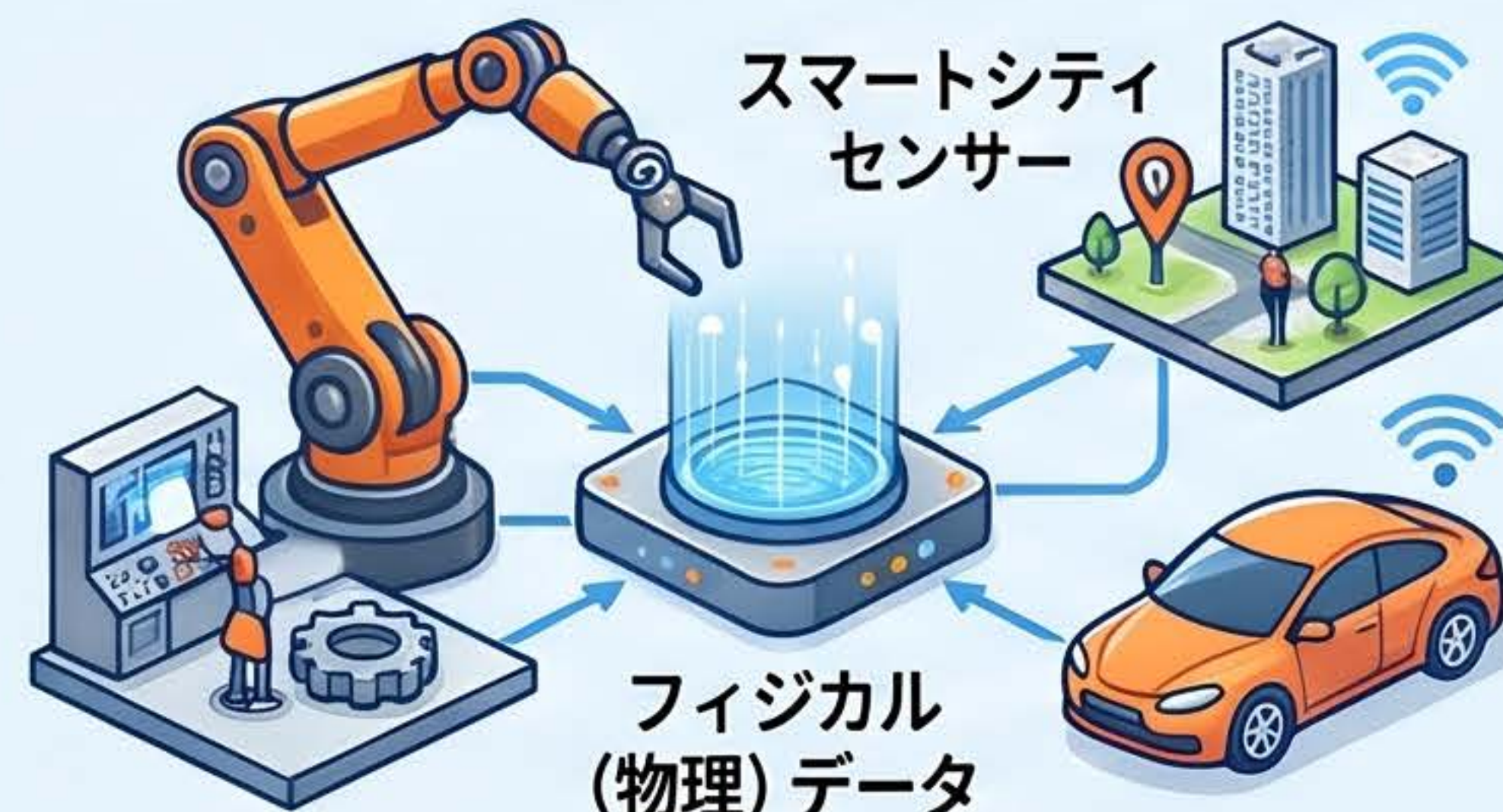
【提言】日本が生き残るための3つの「勝ち筋」

脱ロックインと「タスクルーティング」の導入



難易度に応じて高価な米国製と安価なオープンモデルを賢く使い分ける。

「フィジカルAI」と製造業データの総結集



世界シェア7割の産業用ロボットと現場のリアルデータで世界の覇権を狙う。

ROI重視の「AIファースト」企業への転換



デジタル赤字を恐れず、助成金を活用して全社的なリスクリングを断行する。